平成 22 年 11 月 15 日

東京医科大学およびメディネットと共同で C型肝炎ウイルス由来肝細胞がんの再発予防を目的とした共同臨床研究を開始

免疫細胞療法の専門医療機関である医療法人社団　滉志会　瀬田クリニックグループ[i]（以下、「瀬田クリニックグループ」）は、学校法人東京医科大学（東京都新宿区、以下「東京医科大学」）および株式会社メディネット（神奈川県横浜市港北区、以下「メディネット」）と共同で、C 型肝炎ウイルス由来肝細胞がんに対するラジオ波焼灼（しょうしゃく）療法[ii] とガンマ・デルタ T 細胞療法[iii]を併用する共同臨床研究を開始しましたので、お知らせいたします。

今回の共同臨床研究は、東京医科大学と、メディネット、瀬田クリニック東京および瀬田クリニック新横浜との共同で、東京医科大学の内科学第四講座　森安　史典教授を研究責任医師として実施し、C型肝炎ウイルス由来肝細胞がんに対するラジオ波焼灼（しょうしゃく）療法とガンマ・デルタ T 細胞療法を再発予防として用いた場合の有効性を評価することを目的としています。なお、本共同臨床研究は、40 名の方を対象に実施する予定にしています。

現在、C 型肝炎ウイルスの持続感染者は、日本国内で 150 万人以上[iv]、全世界で約 1 億 7 千万人[v]いると推定されています。国内において、2008 年の肝臓がんによる死亡者数は、約 34,000 人で、がんによる死亡者の約 10%を占め、肺がん、胃がん、大腸がんに次いで、第 4 位となっています[vi]。また、肝がんは、約 95%が肝細胞がんであり、そのうち約 80%が C 型肝炎ウイルスの持続感染に起因すると言われています[vii]。

ラジオ波焼灼（しょうしゃく）療法は、肝細胞がんの局所治療において主流となってきていますが[viii]、C型肝炎ウイルス由来肝細胞がん治療においては、治療に成功しても、再発を繰り返す可能性が高いため、より高い再発予防効果を持つ治療法の確立が求められています。

瀬田クリニックグループでは、初発のC型肝炎ウイルス由来肝細胞がんに対して、ラジオ波焼灼（しょうしゃく）療法後にガンマ・デルタ T 細胞療法を併用することで、より高い再発予防効果を示す新たな治療を提供できるものと期待しております。また、今回の臨床研究を通して、再発予防効果が認められれば、肝細胞がんへの新たな治療実施計画の確立につながると考えております。

以　上

本件に関するお問い合わせ:
医療法人社団 滉志会　法人事務所
神奈川県横浜市港北区新横浜 2-5-14
TEL: 045-478-0223
Email: info@j-immunother.com
URL: http://www.j-immunother.com/index.html

---

[i] **医療法人社団　滉志会　瀬田クリニックグループ**
1999 年 3 月に免疫細胞療法の専門医療機関として開院し、現在は、東京、札幌、新横浜、大阪、福岡にある 5 つのクリニックと 54 を超える連係医療機関との医療連携により、患者さんが全国各地で免疫細胞療法を受診いただける環境の構築を進めております。これまでに受診いただいた患者様は 11,000 名を超え、免疫細胞療法について蓄積した経験や症例数は、世界でも類を見ない規模となっております。

ii ラジオ波焼灼(しょうしゃく)療法
肝臓のがん病巣に刺した針の先端からのラジオ波による熱により、がん細胞を死滅させる治療法。がんの直径が 3cm 以下であり数が 3 個以下の場合に適応されます。2004 年に保険適応となっています。

iii ガンマ・デルタ T 細胞療法 （γδT 細胞療法）
末梢血液中に含まれるガンマ・デルタ型 T 細胞を、がんの溶骨性骨転移等で使用されるアミノビスフォスフォネート製剤と IL-2 の組み合わせによって選択的に活性化、増殖させて患者自身の体内に戻す治療法。アルファ・ベータ T 細胞療法と比較して、より活性化されたガンマ・デルタ型 T 細胞が数多くを占めます。

iv「C 型肝炎について（一般的なQ＆A）」（厚生労働省）

v Fact sheet No164. World Health Organization

vi 国立がん研究センターがん対策情報センター
「人口動態統計によるがん死亡データ（1958 年～2008 年）」

vii 日本臨床腫瘍学会編：新臨床腫瘍学、改定第 2 版、南江堂、2009
日本肝癌研究会肝癌追跡調査委員会編：第 18 回全国原発性肝癌追跡調査報告、2009

viii 第 18 回全国原発性肝癌追跡調査報告によると、2004 年から 2005 年までの 2 年間で肝細胞がんの局所療法は 6,673 例に実施され、その内でラジオ波焼灼(しょうしゃく)療法が選択された例数は 4,812 例（72.1%）と報告されています。これは 4 年前の同調査結果 2,380 例（40.2%）比べて著しく増加しており、ラジオ波焼灼(しょうしゃく)療法は、現在、肝細胞がんの局所治療の主流となってきていると言えます。